

## 「正課体育4年間履修に対する筑波大学学生の意識」

江田 昌佑, 大木昭一郎, 寄金 義紀, 宮丸 凱史, 高橋 伍郎,  
 松田 義幸, 田崎 洋佑, 宮下 憲, 阿江 通良, 椿本 昇三\*,  
 木原 資裕, 佐藤 雄二, 加藤 謙一\*\*, 麻場 一徳, 宮田 浩文

### I. 緒 言

筑波大学体育センターは、現在および将来の学生のスポーツ運動経験を豊かなものにするために、さまざまな人的、物的環境を整える機能を有する体育経営体であり、プログラム・サービス、エリア・サービス、クラブ・サービスなど、大学における体育事業の成立や推進につとめてきている。とりわけ、正課体育のプログラムを重視し、開学以来卒業のために必要な体育実技(理論を含む)の単位数を4単位とし、入学年次から1年に1単位ずつ修得する制度をとってきている。

4年間にわたる体育実技の履修は、学生運動文化を体験させることによって学生生活を豊かにするとともに、生涯にわたる運動生活の充実をめざしている。さらにいえば、学生時代に少なくとも4種目以上のスポーツの技能を学習し、生涯スポーツを発見させること、スポーツの特性を理解し、習得した技能を日常のスポーツ活動に活用して現在の運動生活の水準を高めること、そして、卒業まで少なくとも週1回の運動の機会を保障すること、などをねらいとしている。

開学以来10年以上を経過した現在、こうした正課体育の意義や機能について学生はどのようにとらえているのであろうか。体育センターでは、これまでに学習者としての学生の身体的特性、精神的特性、運動生活、運動環

境などに関する調査研究を継続してきているが、昭和59・60年度の共同研究では、本学の正課体育4年間履修に対する学生の意識を調査することにした。

戦後の教育改革によって、大学教育のカリキュラムに正課体育が必修科目としてとり入れられてから30年以上経過しており、これまでに正課体育に対する学生の意識や態度についての調査がなされている。これらの報告によれば、多数の学生が体育実技を必修科目として支持<sup>1),2)</sup>しており、また、体育実技に対する学生の態度は一般的に好意的で<sup>3),4)</sup>であるとみられる。しかし、こうした報告はいずれも、大学における2年間の正課体育履修に関するものであった。したがって、他大学にはみられない4年間履修のシステムをとっている本学の学生について調査することは、意義あるものといえよう。

この調査報告は、筑波大学の学生が正課体育の4年間履修に対して、どう対応し、どのような学習効果をとらえているか、また、正課体育が学生の現在および将来の運動生活にどのような影響を及ぼすか、さらには、正課体育の4年間履修の意義をどのように把握しているのかを明らかにしようとするものである。この調査研究によって今後のカリキュラム編成や教育方法の改善に役立つ基礎資料を得ようとするものである。

\* 茨城大学教養部

\*\* 宇都宮大学教育学部

## Ⅱ. 調査方法

### 1 調査項目

調査項目は、1) 正課体育4年間履修の意義および正課体育授業に対する学生の実感(Q1, Q2), 2) 正課体育の受講状況(Q3, Q4, Q5, Q6, Q7, Q8), 3) 正課体育の指導方法, 評定, 施設に対する満足度(Q9, Q10, Q11), 4) 正課体育が学生の運動生活におよぼす影響(Q12, Q13), 5) 正課体育授業におけるよろこび体験(Q14), 6) 正課体育受講の効果(Q15, Q16, Q17, Q18), 7) 正課体育履修が生涯スポーツのための基礎的能力や意識におよぼす影響(Q19)から成り立っている(巻末資料Ⅵの調査用紙参照)。

### 2 調査の実施

調査対象は、筑波大学で正課体育を受講している4年生に限定された。調査用紙は、4年生の定時コースの授業が終了する昭和60年1月の授業時に配布され、回収された。回収

された有効サンプル数は814で(有効回収率, 65%)であった。

### 3 データの処理

調査用紙の回答をフロッピーディスクを媒体として筑波大学学術情報処理センターの大型計算機(FACOM M-380)に入力し, SPSSプログラムパッケージにより, 頻度数の算出および質問間のクロス集計を行った。

## Ⅲ. 結果および考察

### 1 正課体育4年間履修の意義および正課体育授業に対する学生の実感

#### 1) 正課体育を4年間履修する意義

初めに、正課体育を4年間にわたって履修する制度に対して、学生がその意義をどのように感じているのかを5階段(大変意義がある, 意義がある, どちらともいえない, あまり意義がない, まったく意義がない)で調べた結果を図1に示す。

4年間履修の意義を肯定的(大変意義があ

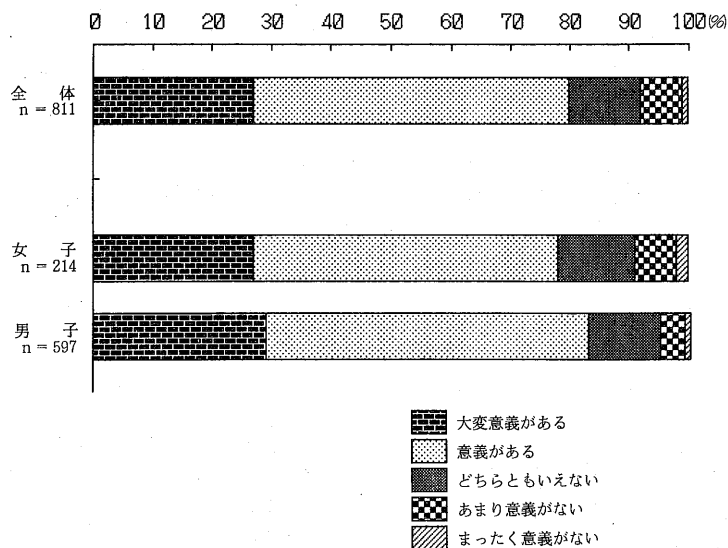


図1 大学正課体育4年間履修(実技)の意義

る、意義がある、を含めて)にとらえている学生は、全体の79.3% (男子77.7%, 女子83.6%)であり、否定的なとらえ方をしている学生は、9%にすぎなかった。男子より女子の方が意義を認めているものが多い傾向であった。

## 2) 学生からみた正課体育の授業

1週間に1時間の正課体育の授業を、学生はどのような時間、あるいは機会としてとらえているのであろうか。学生の実感を調べた結果は図2のようであった。

一般的に、学生は体育の授業を積極的に学ぶ機会、あるいは望ましい体験ができる時間として、肯定的にとらえているとみられる。なかでも、①気分転換・解放感で味わえる時間(73%),②運動不足を解消する時間(73%),③運動の楽しさ、爽快感を味わえる機会

(70%),④仲間との交流・ふれあいを持つ機会(67%),⑤新しい体験ができる時間(63%),⑥運動のしかた・技能の練習法を学べる時間(57%),として受けとめている学生が多いことが示された。

一方、否定的、消極的なとらえ方、例えば、「単位を取るために仕方なく出席したいやな時間」(8%)「あってもなくてもたいした意味を持たないで出席した時間」(7%)、「運動が嫌いで劣等感を味わういやな時間」(3%)、「仲間と運動するのがおっくうで退屈な時間」(2%)などは、極めて少ない結果であった。表1は、体育授業に対する実感を、男女で比較したものである。全体的に女子の方が、肯定的・積極的にとらえている者の割合が多い傾向であるが、とらえ方に違いは認められなかった。これらの結果からみる

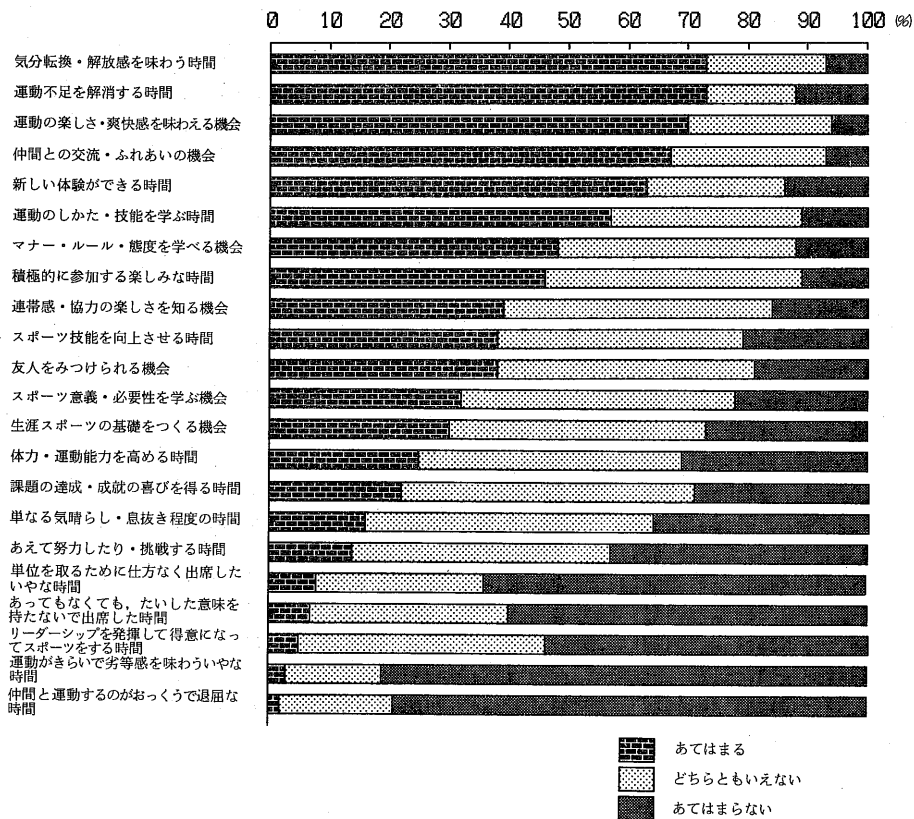


図2 学生からみた体育の授業——体育の授業の実感——

表1 学生からみた体育授業の実感——男子・女子の比較——

	男	子	(%)	女	子	(%)
1	運動不足を解消する時間		69.8	運動不足を解消する時間		81.9
2	気分転換・解放感を味わえる時間		69.8	気分転換・解放感を味わえる時間		80.5
3	運動の楽しさ・爽快感を味わえる機会		66.9	仲間との交流・ふれあいの機会		80.0
4	仲間との交流・ふれあいの機会		62.3	運動の楽しさ・爽快感を味わえる機会		76.7
5	新しい体験ができる時間		58.9	新しい体験ができる時間		75.3
6	運動のしかた・技能の練習法を学べる時間		52.3	運動のしかた・技能の練習法を学べる時間		69.3
7	積極的に参加する楽しい時間		45.2	マナー・ルール・態度を学べる機会		59.1
8	マナー・ルール・態度を学べる機会		44.2	連帯感・協力の楽しさを知る機会		51.2
9	スポーツの技能を向上させる時間		38.4	友人をみつけられる機会		48.8
10	連帯感・協力の楽しさを知る機会		34.9	積極的に参加する楽しい時間		48.1

と、学生の正課体育の授業に対する実感は、思いきり活動し、仲間と楽しく交流する機会として、また、運動技能、ルール、練習法を学ぶ時間として、さらには、解放感や爽快感を味わえる楽しい時間として、とらえていることがわかる。

## 2 正課体育の受講状況

1) 受講科目と受講者数および修得単位数次に、4年間にわたる正課体育授業を学生はどのように履修してきているのかを具体的に質問した。

本学では正課体育のカリキュラム編成の基本方針として、4ヶ年間に全ての開設科目のなかから選択して受講できるように配慮されている。

表2および3は、4年間を通した各種目の受講者数である。定時コースでは、「バレーボール」を受講した者が最も多く、次いで「体操トレーニング」、「テニス」、「バドミントン」、「水泳」の順であった。また、集中選択コースでは、「スキー」を受講した者が最も多く、次いで「スケート」であり、シーズンスポーツを履修した者が多い。

各学年における定時・合併コースの受講者総数の変化を見ると(表2)、4年生の総数が、1、2および3年生のそれらにくらべて少なかったが、これは集中選択コースで単位を取

得していることによるとみられる。また、集中選択コースの受講者のうち約70%は3年生であった。(表3)。

図3に示すように、本学共通体育の必修単位である4単位を取得できると答えた者は全体の81%である、残り約20%の者は4.5単位以上を取得できると答えていた。これは、正課体育に対する学生の積極的な取り組みの一面とみることができよう。

2) 正課体育授業の受講方法への希望および開設方式に対する満足度

図4に示すように、正課体育履修のしかたの望ましい方法は、「学年毎に好きな種目を1種目選択し、4年間で4種目受講する」と答えた者が約60%で最も多く、「好きな種目を1種目選択し、それを4年間続けて受講する」方法を望ましいと答えた者が8%あり、この2つを合わせると、全体の70%弱の者が現行の履修方法を肯定的にとらえているとみることができる。しかし、約20%の者が「学年毎に希望する種目3つくらい選択し、1学期に1種目ずつ受講する」方法を望ましいと答えており、この傾向は昭和56年に実施した「運動生活に関する調査<sup>5)</sup>」においても認められた。

次に、図5に示すように、現行の正課体育の開設制度に対する満足度については「定時・合併コースと集中選択コースを開設する

表2 定時・合併コースにおける4年間にわたる開設科目別の受講学生数

科 目	1年	2年	3年	4年	5・6年	合 計	%
バレーボール	88	73	70	67	2	300	9.23
体操トレーニング	67	84	79	62	3	295	9.07
硬式テニス	49	49	76	85	4	263	8.09
バドミントン	78	34	34	93	2	241	7.41
水 泳	37	58	59	65	3	222	6.83
陸上運動	59	30	38	56	8	191	5.87
サッカー	77	47	34	30	3	191	5.87
ハンドボール	50	65	66	2		183	5.63
バスケットボール	94	36	15	34	1	180	5.54
剣 道	33	69	18	34	5	159	4.89
サイクリング	3	8	85	50	1	147	4.52
柔 道	46	52	21		1	120	3.69
基本運動	1	32	60	22	1	116	3.57
卓 球		23	4	67		94	2.89
器械運動	38	41	9	1		89	2.74
ソフトボール	1	15	35	37		88	2.71
ラグビー	49	20	5	1		75	2.31
ゴルフ	3	11	38	15	1	68	2.09
弓 道	1	1	26	26	1	55	1.69
ライフル射撃		25	15	2		42	1.29
オリエンテーリング	16	24				40	1.23
ウインドサーフィン		6	6	5	6	23	0.71
空 手	16	4	1			21	0.65
野 球	10	4	3	2		19	0.58
トリム運動	6	3	3	3	3	15	0.46
ヨット		3	7	2	1	13	0.40
ボート		1	1			2	0.06
合 計	822	818	808	761	43	3252	100

表3 集中選択コースにおける4年間にわたる開設科目別の受講学生数

科 目	3年	4年	5・6年	合計	%
スキー	42	13	4	59	23.4
スケート	30	10	5	45	17.9
オリエンテーリング	23	1		24	9.5
アーチェリー	17	4		21	8.3
ジャズダンス	10	9	1	20	7.9
空 手	10	6		16	6.3
ヨット	9	5	1	15	6.0
合気道	9	6		15	6.0
ボウリング	8	6	1	15	6.0
水 泳	8	4	2	14	5.6
ボート	7			7	2.8
心身鍛練法	1			1	0.4
合 計	174	64	14	252	100

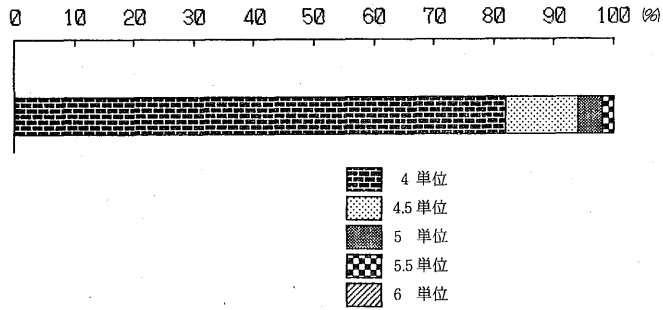


図3 正課体育の修得単位見込み数

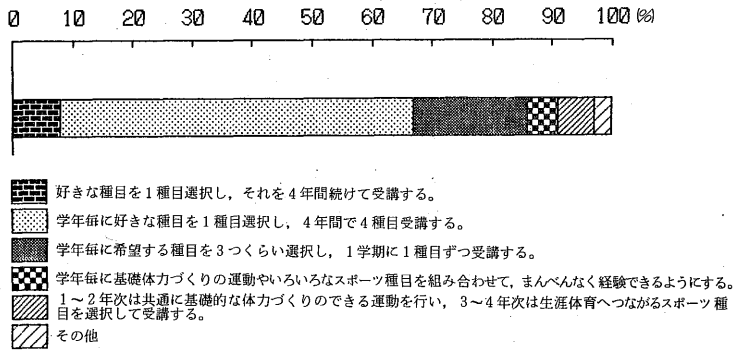


図4 正課体育の受講のしかたについて

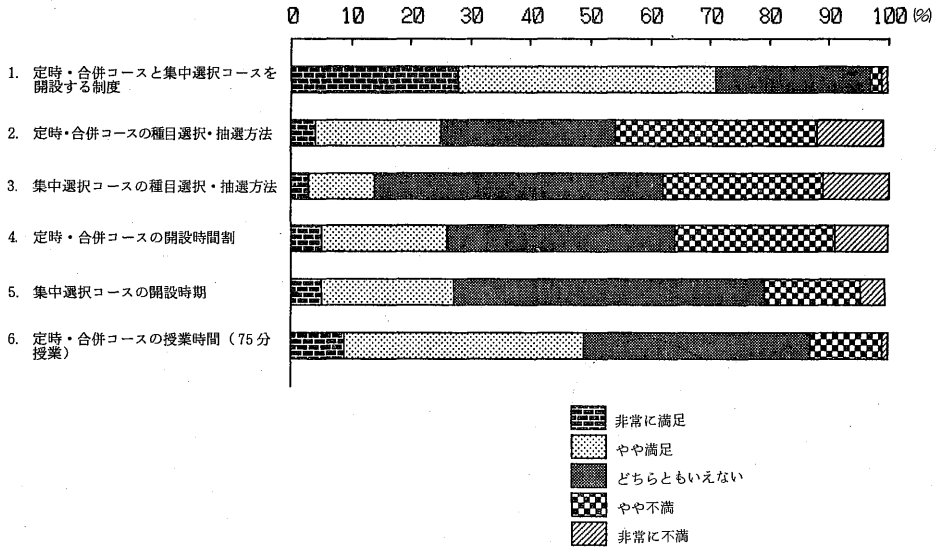


図5 正課体育の制度について

制度」に70%強の者が満足と答えている。しかし、これらのコースにおける種目選択・抽選方式および開設時間割に関しては、不満を示すの方が満足を示す者よりも多く、現行の選択決定方式を検討すべき時にきていることをうかがわせる。

### 3) 重複履修について

前述のごとく、本学の正課体育履修の基本方針は、学生が4年間に少なくとも4種目以上のスポーツを体験することであるが、同時に、重複履修すなわち同一種目を2度以上履修することも容認されている。

図6に示すように、全体の42%の者が重複履修を経験している。そして、その80%以上

の学生が自ら進んで履修し(図7)、75%の者が満足のいくものであったと答えている(図8)。

重複履修のマイナス面として危惧される点は、「参加意欲の低下」、「レベルに応じた指導が受けられないこと」、あるいは、「教師との慣れ合いや新鮮さの欠除」が挙げられる。図9に示すように、本調査では、これらのマイナス面に積極的にあてはまると答えた者は少なく、かえって「技能の向上」や「気分的な安心さ」というプラス面が高く評価されており、重複履修の利点が認められていると見てよいであろう。

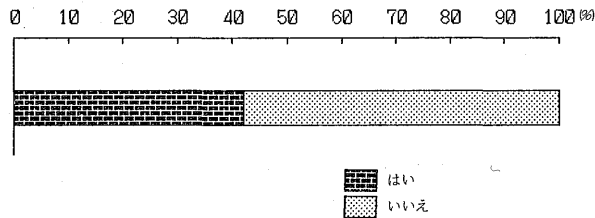


図6 重複履修の経験の有無

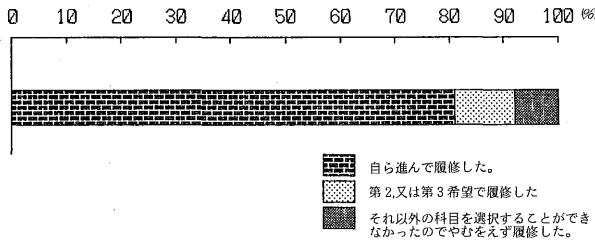


図7 重複履修の理由

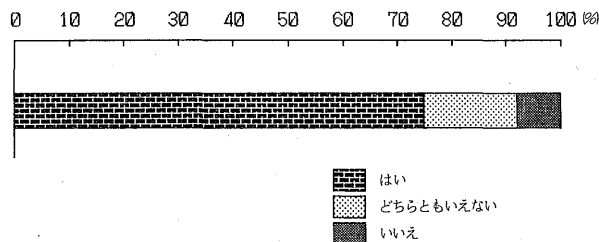


図8 重複履修に対する満足度

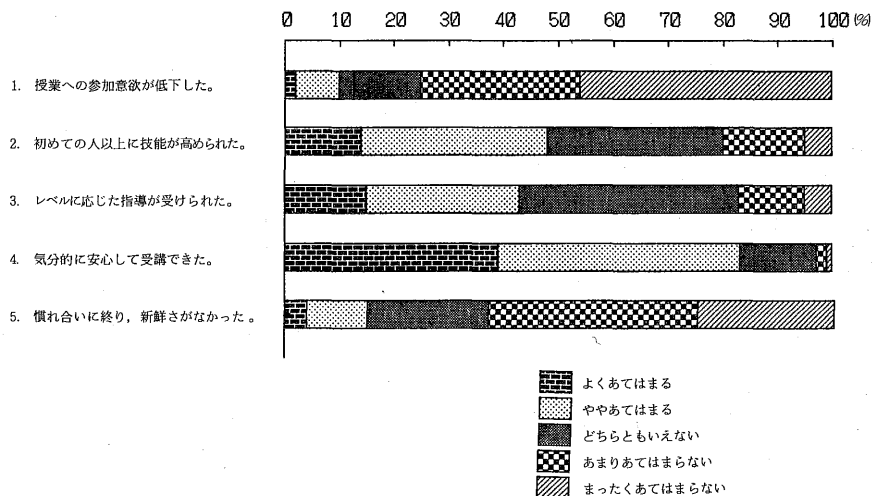


図9 重複履修した授業に対する感想

#### 4) 出席率および出席態度について

図10に示すように、正課体育授業への出席率の中で最も多いのは80%台で34%あり、90%以上の出席率の者も含めると全体の63%であった。これを昭和52年の調査（「正課体育に関する調査」）<sup>6)</sup>と比較すると大きな出席率の低下がみられる。この理由は、当時は単位認定の条件として開講時間数の80%以上の出席が要求されていたことによるものと思われる。現在では、全学の履修規定に沿って2/3以上の出席が評価の対象にされるということからみれば決して悪くない出席状況といえよう。

正課体育授業へ出席する際の態度については（図10）、64%の者が積極的に参加できたと答え、15%の学生は消極的であったと回答している。

図11は、正課体育の授業への出席態度と4年間履修の意義のとらえ方との関係をみたものである。体育の授業への出席態度が積極的である学生ほど、4年間履修の意義を肯定的にとらえているものが多いことが明らかであった。しかし、「やや消極的」と回答した者のうち約50%が「大変意義がある」あるいは「意義がある」と回答していることから、

正課体育の意義を感じながらも、授業にはあまり積極的に出席していない学生もかなりいることがわかる。

図12は、出席態度と正課体育授業に対する実感のうち「積極的に参加する楽しみな時間であった」および「単位をとるために仕方なく出席したいやな時間であった」という質問に対する回答との関係をまとめたものである。「非常に積極的」に出席したと回答した者のうち、85.1%が「楽しみな時間であった」としているのに対し、「非常に消極的」に出席したと回答した者の中に、「楽しみな時間であった」と回答した者が1名もいないこと、また、「非常に消極的」に出席したと回答した者のうちの50%が「単位をとるために仕方なく出席した」と回答していることは、特に注目すべき点であると考えられる。今後、このような学生に対し、どのように動機づけを行うかが大きな課題となるであろう。

### 3 正課体育の指導方法、評価、施設に対する満足度

#### 1) 指導方法に対する満足度

4年間の正課体育履修中にうけた教官の指導にたいし、学生はいかなる評価をしていた



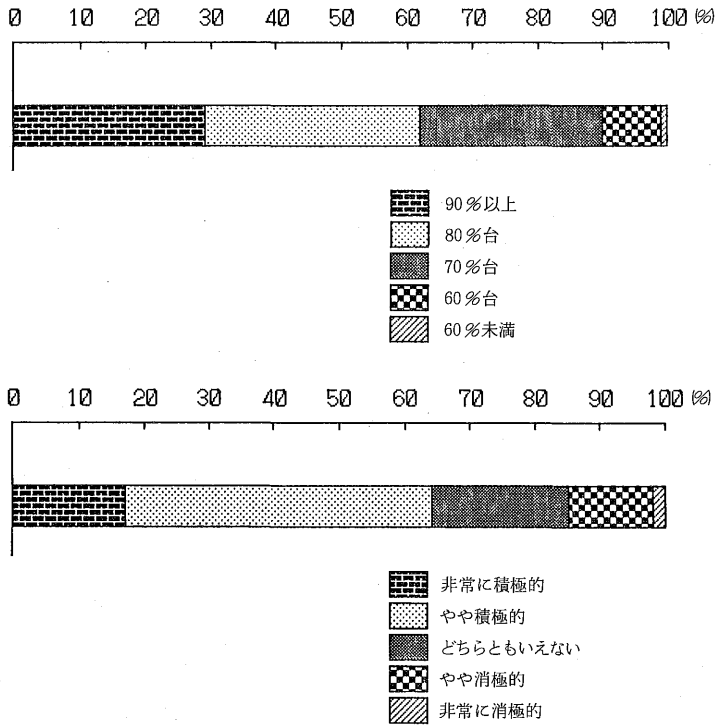


図10 体育授業における出席率と出席態度について

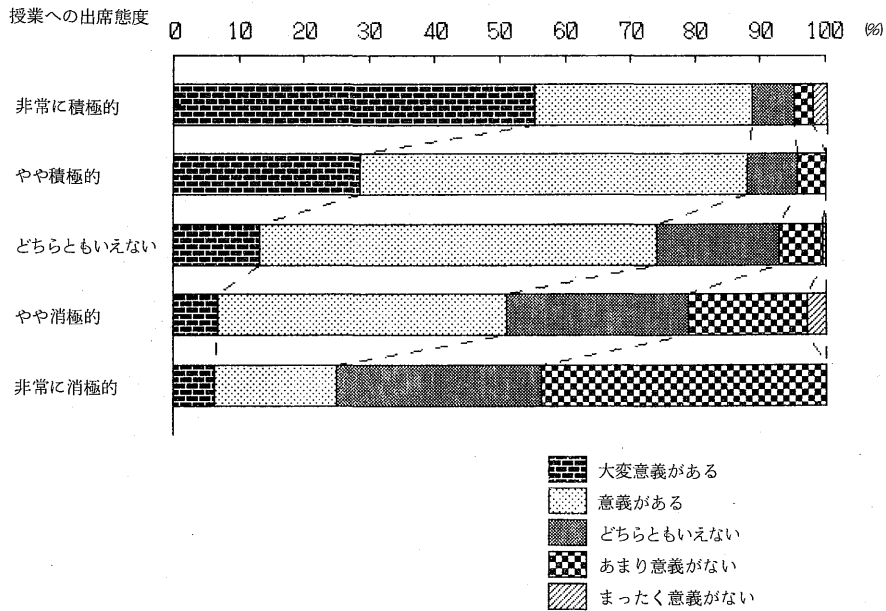


図11 出席態度と正課体育4年間履修の意義との関係

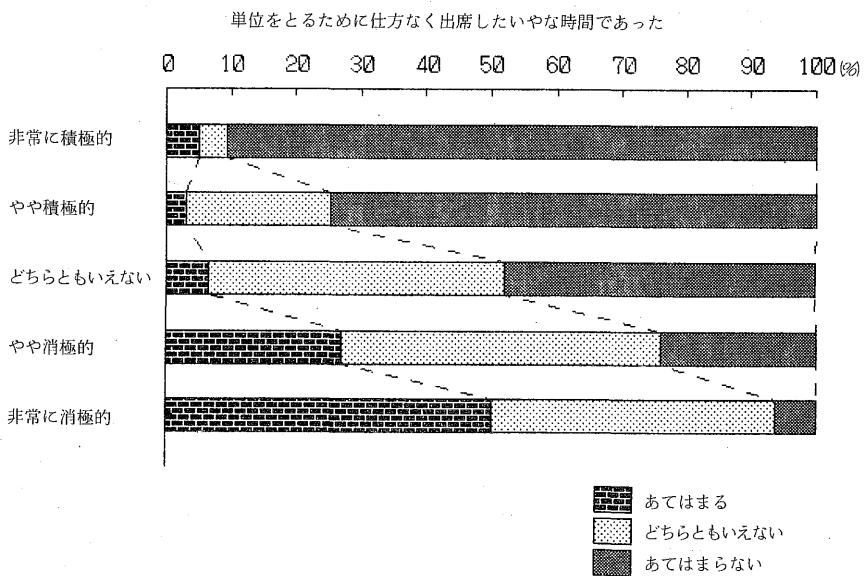
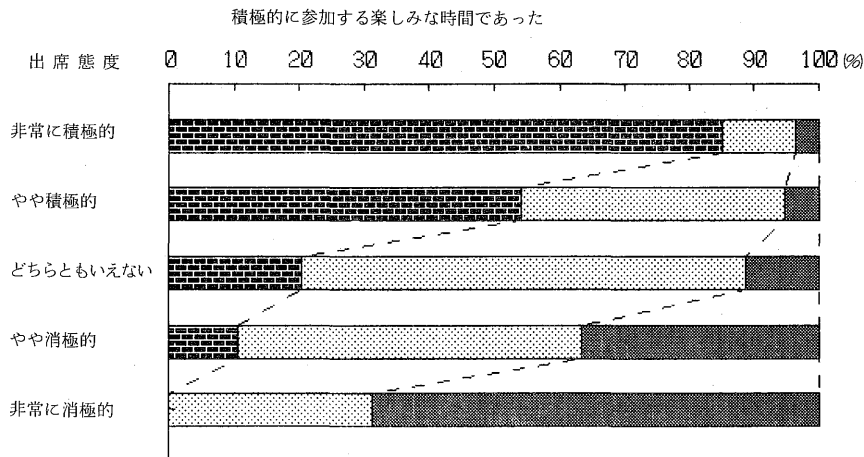


図12 出席態度と正課体育授業に対する実感との関係

であろうか。図13に回答状況を示した。指導法一般に対して満足と回答した学生の反応は女子(68%)が男子(58%)よりも高く全体で61%であった。学類別に見ると、人文学類(74%)が最も高く、比較文化学類と芸術専門学群(52%)がともに最も低かった。学生の示したこのような反応が指導の何に対してなのか。図14は指導の個々の内容と教官の人物像についての応答結果である。「やや満足」を含めた満足肯定者の割合は、「教官の人柄」

(80%)や「指導に対する姿勢」(76%)が上位にあり、次に「指導のすすめ方」(73%)や「運動ルールの説明」となっている。設問が具体的指導内容になってくるとやや低下傾向にあった。この中で、「目標とする技能水準」や「個別指導・能力別指導に対する配慮」などの項目が他に比べて満足度が低い傾向にあった。また、この2つの設問は、「非常に不満」と答えた学生の割合が最も多かった。これらの結果から、指導者の人物像や指導全

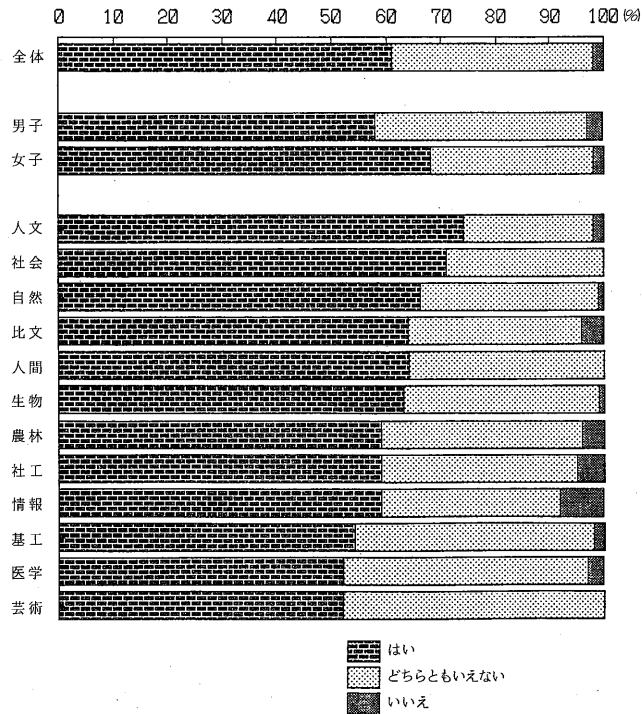


図13 指導法に対する満足度の分布(学類, 学群別)

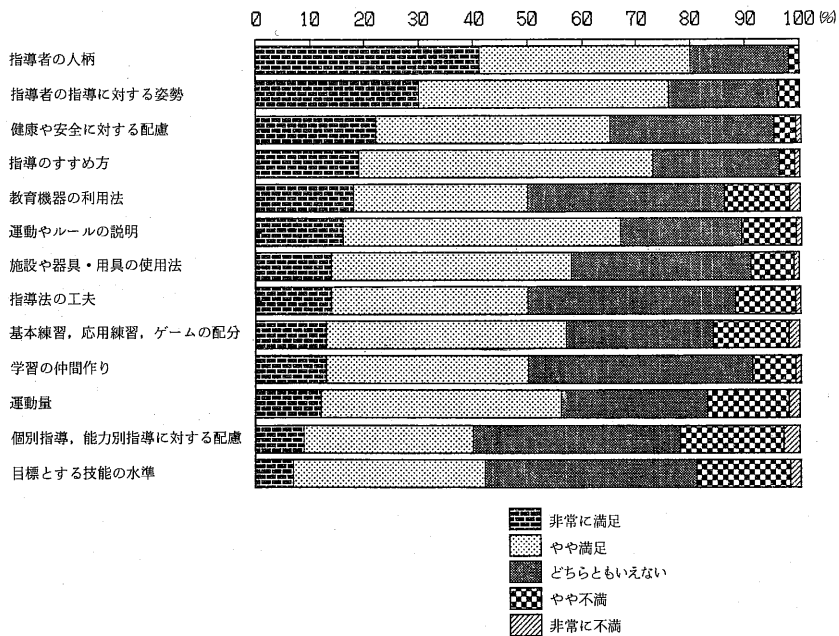


図14 指導の内容に対する満足度

般について、学生は心理的に満たされた傾向にあるが、技能水準や能力別指導のように具体的な個人の技術・技能レベルを考慮した指導を期待している者が約20%存在することは、今後の大学体育の指導方法に一つの課題を提供していると言えよう。

### 2) 正課体育の評定に対する満足度

4年間の正課体育履修で得た自己の評定(成績)に対して、学生はそれを正当な評価として受けとめているであろうか。図15に回答状況を示した。「やや満足」を含め肯定的な応答をした者の割合は、「成績全般」に対しては69%であった。一方、評価の対象となる個々の項目についてみると、「出席状況」が最も上位で、次いで「技能の上達」、「学習に対する意欲」、「学習態度やマナー」、および「知的理解度」の順であった。この結果は、学生の出席重視の意識を反映しているのかもしれない。また、知的理解度が他の項目にくらべて低位にあるのは、評価の方法にあいまいさがあるためであろう。

### 3) 体育施設に対する満足度

学生は、本学の体育施設に対しどの程度の満足感を抱いているであろうか。図16に回答

状況を示した。回答項目のなかで、「施設全般」や「施設の種類と広さ」などは、満足肯定者が80%~90%を占めているが、施設の管理や内部設備の整備に対して不満を示す者が多い。これらの結果から、更衣室やロッカー・シャワーの整備あるいは用具の安全管理について今後の配慮が望まれる。

## 4 正課体育が学生の運動生活におよぼす影響

### 1) 運動生活の類型

今回の調査では、体育センターがこれまで行なった2回の「運動生活に関する調査」<sup>5)</sup>・<sup>6)</sup>と同様に、表4に示す宇土の分類<sup>7)</sup>による8類型によって、学生の運動生活の実態をとらえようとした。結果は表5に示すとおりである。全体として、「現在は正課体育の授業以外には意図的な運動はほとんど行っていない」類型8のStay階層の割合が220%と最も多く、次いで類型7のArea利用者の割合が多い。また、前回の調査<sup>6)</sup>と比較してみると、Program参加に関係している類型の占める割合が減少し、Area利用に関係している類型の占める割合が増加している。この傾向

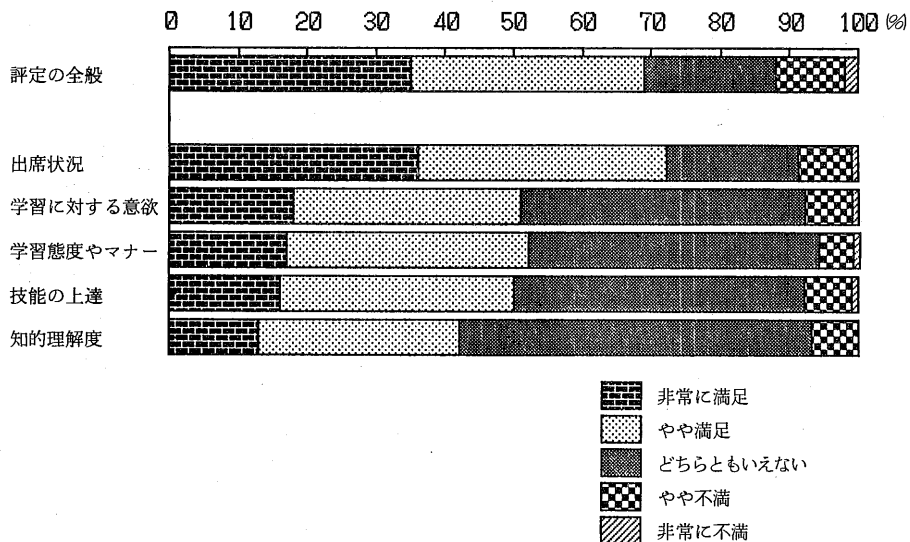


図15 正課体育の評定に対する満足度

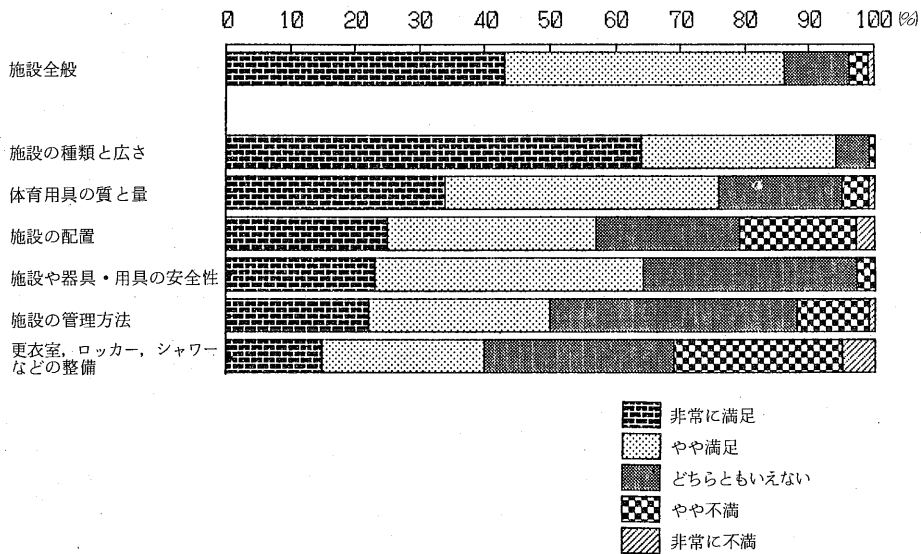


図16 体育施設に対する満足度

表4 運動生活の類型

体育事業／運動生活の類型	1	2	3	4	5	6	7	8
C.S(クラブ・サービス)	○	○	○	○	○	○	○	○
P.S(プログラム・サービス)	○	○	○	○	○	○	○	○
A.S(エリア・サービス)	○	○	○	○	○	○	○	○

1…クラブ運動者としての生活(C)  
 2…クラブ運動者であると同時にプログラム運動者としての生活(C・P)  
 3…クラブ運動とエリア運動者が組み合った運動者としての生活(C・A)  
 4…クラブ運動者、プログラム運動者、エリア運動者の三つが組み合った運動者としての生活(C・P・A)  
 5…プログラム運動者としての生活(P)  
 6…プログラム運動者とエリア運動者としての生活(P・A)  
 7…エリア運動者としての生活(A)  
 8…いずれの体育事業にもかかわりのないStay運動者(S)

(宇土正彦, 体育管理学, 大修館書店1970による)

表5 運動生活の類型別の割合

	1	2	3	4	5	6	7	8	計
A	○	○	○	○	×	×	×	×	41.3%
B	×	○	×	○	○	○	×	×	37.2%
C	×	×	○	○	×	○	○	×	57.0%
D	×	×	×	×	×	×	×	○	22.0%
全体(%)	8.6	8.2	10.5	14.0	4.2	10.8	21.7	22.0	
男(%)	9.9	8.5	10.1	14.0	4.9	10.9	21.1	20.6	
女(%)	5.2	7.6	11.8	13.7	2.4	10.4	23.2	25.6	

は、自由な時間に上手に施設を利用して運動を楽しむ学生が増加していることを示唆していると思われる。また、類型8のStay階層が最も多く、また、Programに参加する者が減少している傾向は、前回の報告<sup>7)</sup>においても指摘されており、再度、検討の必要性を確認する結果となっている。

図17は運動生活階層と4年間履修の意義のとらえ方との関係をまとめたものである。

Club加入階層、Program参加階層およびArea利用階層といった自発的にスポーツや運動を楽しんでいる階層の方が、日常ほとんど運動していないStay階層よりも、4年間履修の意義を肯定的にとらえているものが多い結果であった。とりわけ、Stay階層では、「大変意義がある」とするものが、他の階層より顕著に少ない傾向がみられた。したがって、4年間履修に対する意義のとらえ方は、学生の現在の体育やスポーツの実施状況、参加態度と深くかかわっているとみられる。

図18は、正課体育履修と他の体育事業とのかわり合いについて調べたものである。正課体育で履修したことがきっかけとなって、

その後、運動部や同好会に所属するようになった種目は、「水泳」、「サッカー」、「ラグビー」、「バスケットボール」、「硬式テニス」などの球技種目に何人かみられた。延べ人数では31名であり、全サンプルの4%にすぎなかった。このことは、正課体育授業が学生を体育系の課外活動団体に所属させることに対してさほど影響力をもたないことを示していると思われる。

正課体育で履修したことがきっかけとなって、その後、スポーツデーやスポーツ教室に参加して運動するようになったものは、129名、全サンプルの16%であった。またその種目は、「サッカー」、「バスケットボール」、「バレーボール」、「ハンドボール」などの球技種目に集中していた。これは、スポーツデーで行なわれている種目との関連で球技種目に集中したものであると思われる。

また、正課体育で履修したことがきっかけとなって、その後、自由時間に施設や用具を利用して、自由にその運動・スポーツをするようになったと答えたものは328名おり、全サンプルの約40%を占めた。種目の内訳は、

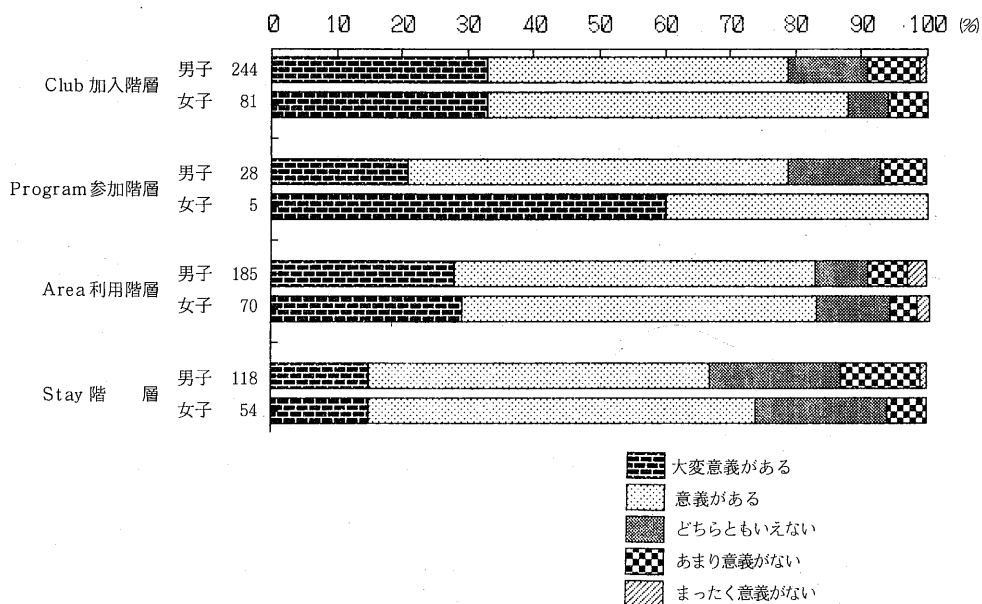


図17 運動生活階層別にみた4年間履修の意義のとらえ方

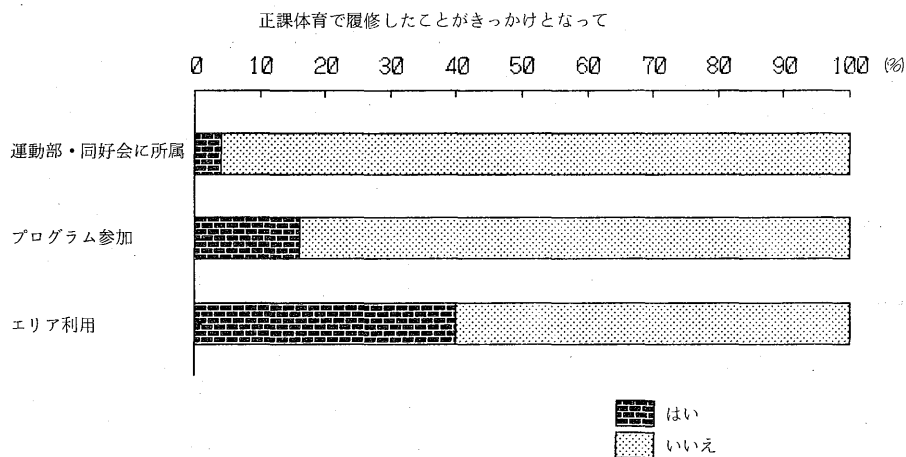


図18 正課体育履修とクラブ所属，プログラム参加およびエリア利用との関係

「体操トレーニング」，「硬式テニス」，「水泳」に集中していた。これは，総合体育館やテニスコートが自由に利用できることや屋内プールの開放時間の連絡，調整など恵まれた環境条件が用意されていることによると思われる。

以上の結果を，大学2年生から4年生までの運動生活を調査した山川ら<sup>6)</sup>の報告と比較すると，正課体育を受講したことがきっかけとなって，体育系の課外活動団体に所属した学生は，前回の調査では2.7%であったが，この数字は4年生のみを対象とした本研究の結果とほぼ同程度であった。スポーツデーなどに参加するようになった学生や自由時間に運動するようになった学生は，山川らの報告<sup>6)</sup>ではともに全サンプルの約15%であったが，本研究ではそれぞれ16%および40%であり，正課体育の履修を通して，恵まれた運動施設を利用しようとする積極的な態度がみられるようになったことを示唆しているとともに，運動生活類型別にみた前述の傾向と同様の結果であった。

### 5 正課体育授業におけるよろこび体験

図19は，正課体育の授業でどのようなときに喜びを感じるかという質問に対する応答結

果である。ここに提示した9項目すべてについて肯定的反応を示していることがわかるが，中でも，「十分にからだを動かして汗をかいたとき」，「仲間と楽しく運動ができたとき」，「スポーツそのものに夢中になれたとき」，「気分転換や解放感が味わえたとき」などの項目に対して80%以上のものが喜びを感じると回答している。また，「運動のコツがわかり技能が伸びたとき」，「新しい知識を得たり体験ができたとき」，「競争やゲームで勝ったとき」，「体力・運動能力の伸びが確かめられたとき」，「ほめられたり，認められたりしたとき」にも喜びを感じると回答したものが過半数を占めた。これらの結果はすでに高田<sup>8)</sup>が報告している良い授業の条件として提示している結果とよく一致している。加えて，これらの結果は，学類・年齢にはそれほど影響されないが，女子は男子に比較して喜びを感じるものが多い傾向が認められた。

図20に示すように，出席率と「十分に体を動かして汗をかいたとき」に対する回答結果との関係を見ると，出席率が高い学生ほど肯定的回答を与えていることがわかる。これらの結果は，筑波大学の正課体育授業が喜びを育てるという点に関して貢献していることを意味すると同時に，小林<sup>9)</sup>が指摘する「喜び

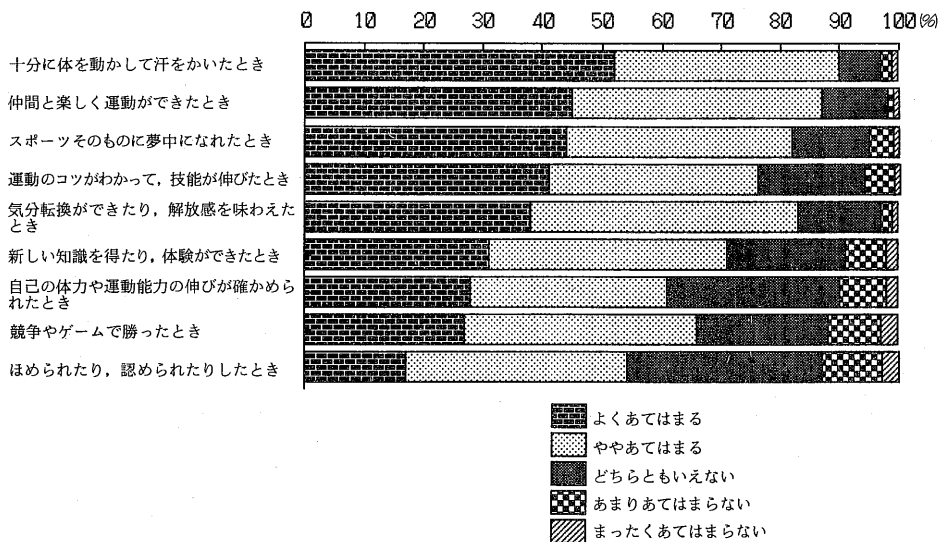


図19 正課体育授業において喜びを感じる時

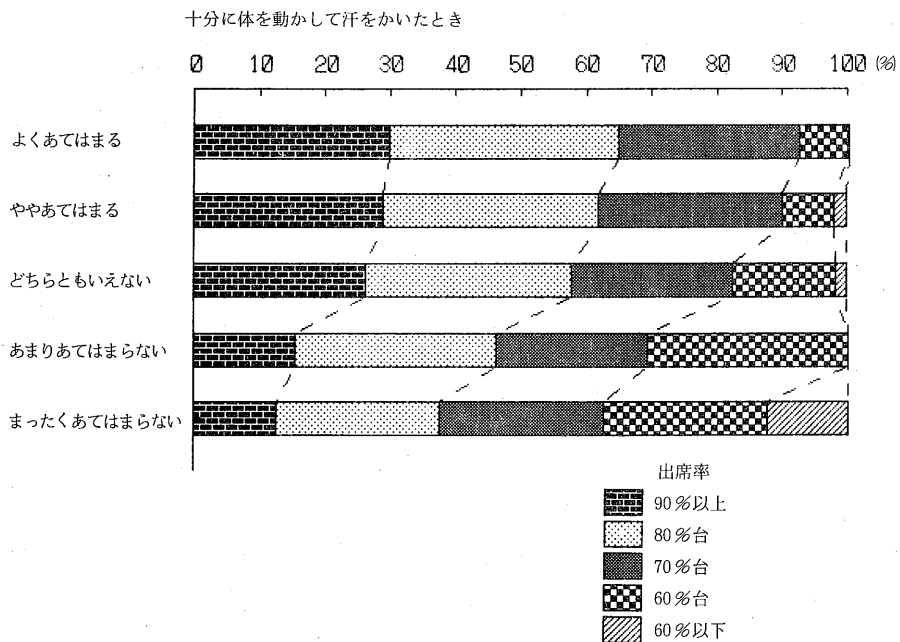


図20 出席率と「十分に体を動かして汗をかいたとき」に喜びを感じるとの関係



を育てることが授業の基底である」という意見を支持する結果であると考えられる。

## 6 正課体育受講の効果

### 1) 新しいスポーツ・運動体験の有無

図21に示すように、本学の正課体育を4年間履修し、「中学・高校までにできなかった新しいスポーツ・運動体験があった」と答えたものは全体の77%存在した。では、その内設を履修科目別にみると(図22)、「体操トレーニング」と答えたものが最も多く、次いで「硬式テニス」、「バドミントン」、「ゴルフ」と続いている。これらの種目は、中学・高校の正育体育には含まれることの数少ない運動種目である。また、「サイクリング」、「オリエンテーリング」、「ライフル射撃」「弓道」などについても同様のことが考えられる。「器械運動」、「柔道」、「剣道」、「ハンドボール」、「ラグビー」、「陸上運動」、「水泳」などの種目は、中学・高校において経験する種目であると思われるが、その内容において新鮮な体験があったため、上位を占めたものと思われる。さらに、「サッカー」、「バスケットボール」、「バレーボール」は、中学・高校において広く行なわれているため、また、他の種目では

いまだ経験していないため、それぞれ下位に位置したものと思われる。いずれにせよ、新しいスポーツ・運動体験が多いということは授業効果との関連も含め重要な要素であり、筑波大学の4年間体育履修制度の特色を示しているといえよう。

### 2) 運動技能レベルの向上

図21に示すように、本学の正課体育の授業を通して、「高校までの運動技能のレベルをより向上させることができた」と答えたものは全体の35%、「できなかった」と答えたものは22%、「どちらともいえない」と答えたものは43%いた。また、科目別にみると(図23)、「水泳」、「硬式テニス」、「ラグビー」、「バドミントン」、「卓球」などは、技能レベルの向上があらわれやすい種目であると考えられる。これらの結果は、海野ら<sup>10)</sup>が報告した結果とも一致するものであり、特に「水泳」が技能向上の分りやすい運動種目として他と際立った特徴をもっていることがわかる。

受けた指導に対する満足度と正課体育授業における新しいスポーツ体験およびスポーツ技能水準の向上との関係を見ると(図24)、新しいスポーツ体験は、指導に対する満足度に関係なく70~80%のものが肯定的回答を示

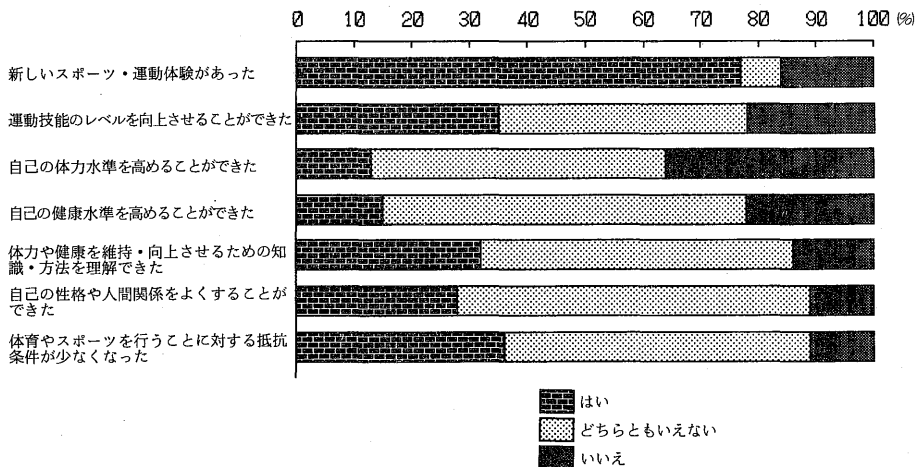


図21 正課体育授業の効果

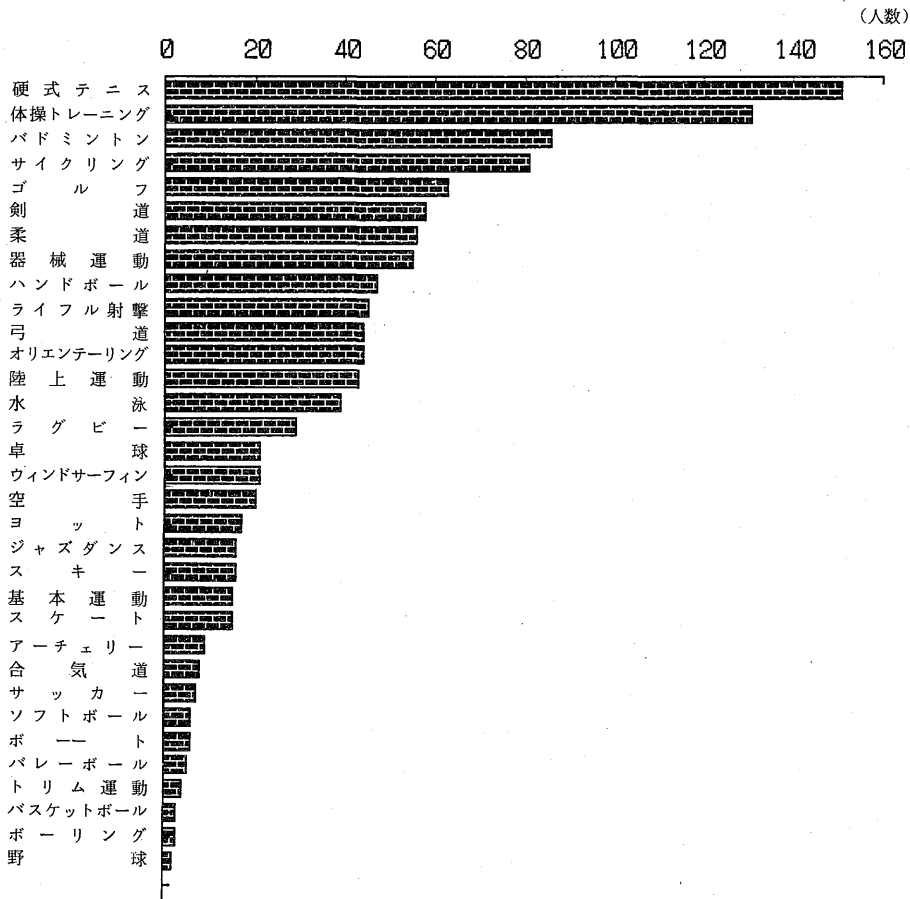


図22 履修科目別にみた新しいスポーツ，運動体験の有無

し、また、運動技能水準が向上たと自覚しているものも、指導に対する満足度に関係なく25～41%のものが肯定的回答を示した。これらの結果は、新しいスポーツ体験があったもののうちの約半数が技能レベルが向上したと考えていることを示唆している。

### 3) 体力・健康水準におよぼす影響

図21に示すように、4年間の正課体育の履修が「自己の体力や健康の水準を高める効果がある」と答えたものは15%弱と少なく、「どちらともいえない」と答えたものが過半数を占めた。一方、「体力や健康を維持・向上させるための知識や方法の理解に効果があった」と答えたものは全体の32%と、実際の体力・健康水準への効果に対して肯定的に回答した

ものの数に比較して約2倍多かった。

「体力水準を高める効果があった」と答えたもののうち93.3%、「健康水準を高める効果があった」と答えたもののうち89.5%、および「知識方法の理解に効果があった」と答えたもののうち89.3%が、それぞれ、正課体育4年間履修について「大変意義がある」、あるいは「意義がある」と答えている。

一方、「体力水準が高まったとすれば、どのような体力要素が高まったか」という質問に対しては、「調整力・器用さ」をあげた者が136人(36.0%)と最も多く、次いで「持久力・スタミナ」が81人(21.4%)「筋力・パワー」が61人(16.1%)、「柔軟性」が59人(15.6%)「スピード、敏しょう性」が41人

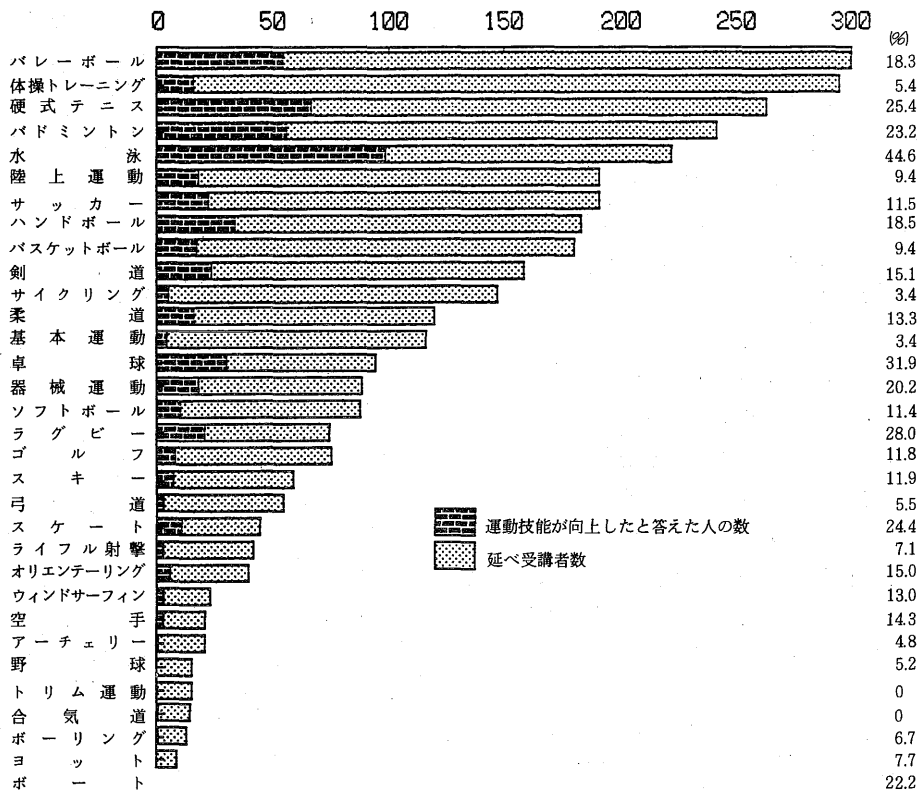


図23 履修科目別にまた運動技能が向上したと答えた者の割合

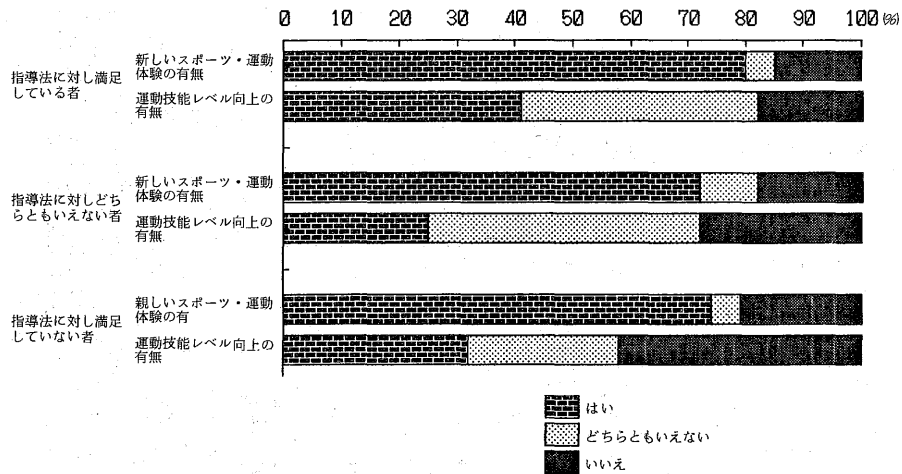


図24 指導法と新しいスポーツ体験および技能レベル向上との関係

(10.8%)の順であった。

以上の結果、4年間の正課体育履修が、学生個人個人の体力や健康の水準を高める効果があると考えている者は少ないが、そのための知識や方法の理解には多少効果があると考えおり、これらの効果を認めている者の大部分は、大学の正課体育を4年間履修することに対して意義を認めていることが示された。

一方、図21に示すように、「4年間の正課体育履修が自己の性格や人間関係にいい影響を与えた」と答えた者は、全体の28%おり、この数値は、前述した体力・健康水準への影響に関して肯定的に答えた者の数を上まわった。このことは、少なくとも学生の意識として、週1時間の正課体育の授業が、実際の体力・健康面への効果よりむしろ人間形成への効果が大きいと感じていることを示唆している。

また、具体的には、図25に示すように、「協調性が身についた」、「明朗性が高まった」、「他人への気配りができるようになった」など、

集団行動において培われる人間性に関して肯定的に答えた者が多く、「集中力が養われた」や「忍耐力が養われた」という項目に対して肯定的回答を与えた者も30%弱いた。また、「異性への理解が深まった」、「統率力が高まった」および「人生について考えるようになった」といった項目に対して「あてはまらない」と答えた者が30%以上いた。

以上の傾向は、Q2において、正課体育授業に対する学生の実感として、スポーツや運動を仲間と一緒にやることに伴う爽快感や解放感、あるいは新しい体験などといった内容に肯定的な反応を示した者が多かったこととよく一致している。

図26は、出席態度と人間関係あるいは性格の改善に対する効果との関係をまとめたものである。より積極的に授業に参加した者ほど、性格や人間関係をよくすることができたと回答している。具体的には、「集中力が養われた」、「協調性が身についた」、「明朗性が高まった」という3つの質問項目において、より顕

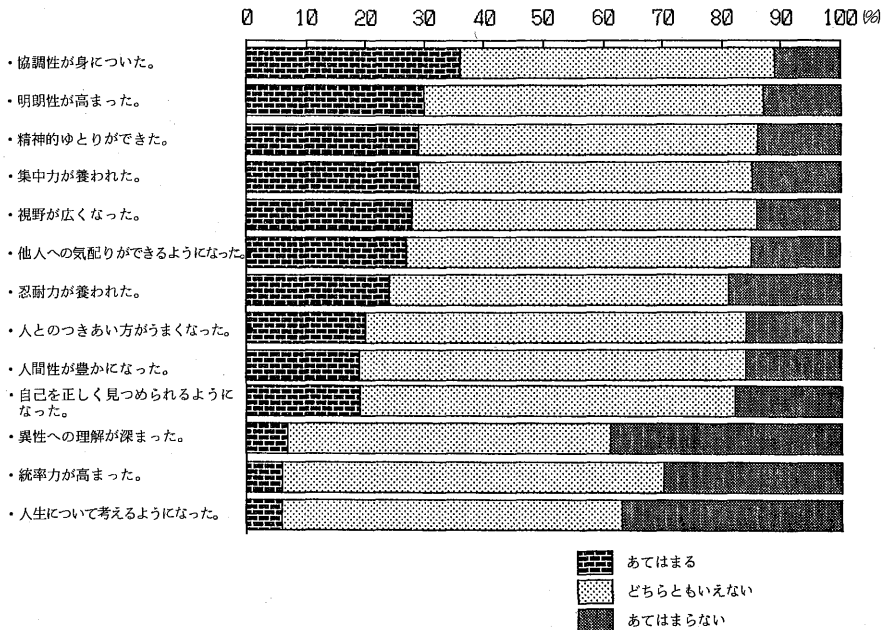


図25 正課体育授業による性格や人間関係への影響

4年間の正課体育によって性格や人間関係をよくすることができた。

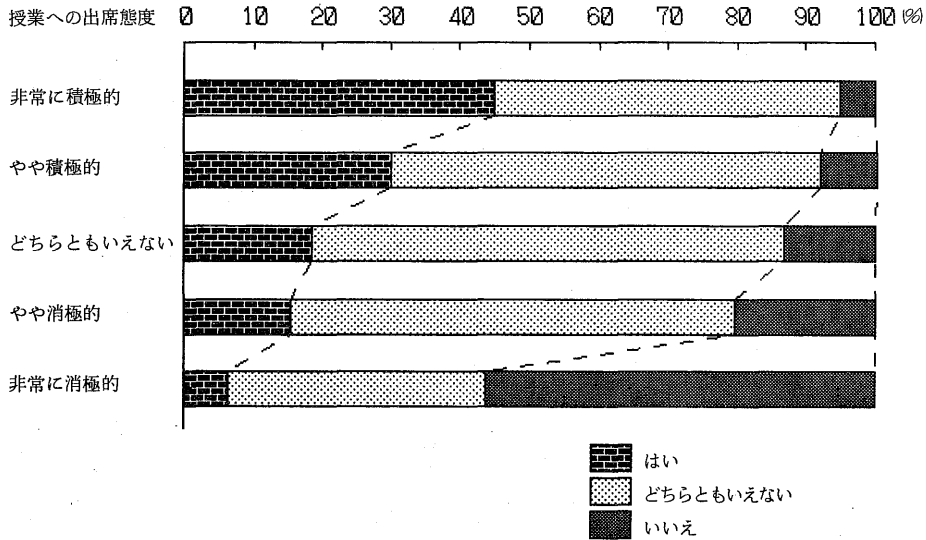


図26 出席態度と人間関係あるいは性格の改善に対する効果との関係

著な傾向が認められた。(図27)

#### 4) 体育やスポーツを行うことに対する抵抗条件におよぼす影響

図21に示すように、「4年間の正課体育の履修によって体育やスポーツを行うことに対する抵抗条件が少なくなりましたか」という質問に対して、「はい」と答えた者は36%おり、前述した体力・健康水準および人間関係に与える影響について肯定的に答えた者のパーセントを上まわった。また、「はい」と答えた者のうち、4年間履修に対して意義を認めている者は91.3%もある、全体の76.9%に比較して高値を示した。

さらに、抵抗条件についての具体的項目に対しては(図28)、「運動が下手でも勝負や記録にこだわらずに楽しむようになった」あるいは「運動そのものに抵抗を感じなくなった」という項目に対して「あてはまる」と答えた者は全体の半数近くおり、この2つの項目において「あてはまる」と答えた者のうち81%が「中学・高校まででできなかった新しいスポーツ・運動体験があった」(Q15(1))と答えた。以上の結果、これらの学生では、本

大学での正課体育授業の中で、それまでに体験できなかったスポーツや運動を体験することにより、スポーツがより身近になり、以前抱いていたスポーツに対する違和感が少なくなったものと思われる。また、「積極的に運動する時間を見つけるようになった」、「一緒に運動する仲間ができた」、「用具などに多少費用がかかってもやりたいと思うようになった」、「一人でも運動するようになった」、および「学内の施設や用具を積容的に利用するようになった」という項目には、32~34%の者が「あてはまる」と答えたが、「積極的にスポーツデーなどの学内の運動プログラムに参加するようになった」と答えた者は21%に過ぎなかった。

以上の傾向は、4年間の正課体育の履修が学生にとってスポーツや運動が高校時代までに比較してより身近なものとなることに役立っており、また、彼らのスポーツへの参加様式は、与えられたスポーツプログラムやエリアよりはむしろ、好きな時間に好きな仲間と好きな場所でスポーツを行うといったパターンが多いことを示唆しており、これは、

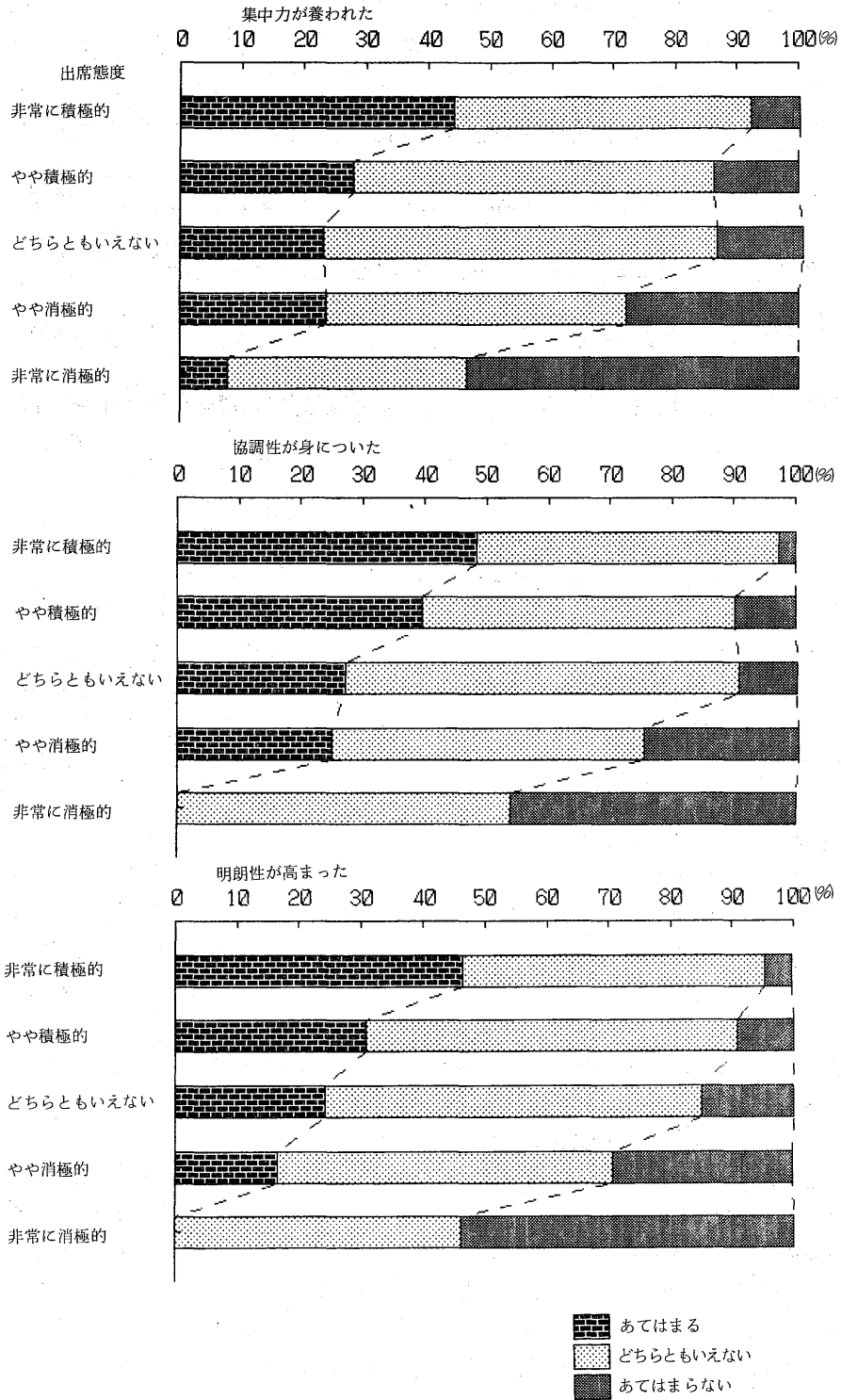


図27 出席態度と性格・人間関係に対する効果との関係

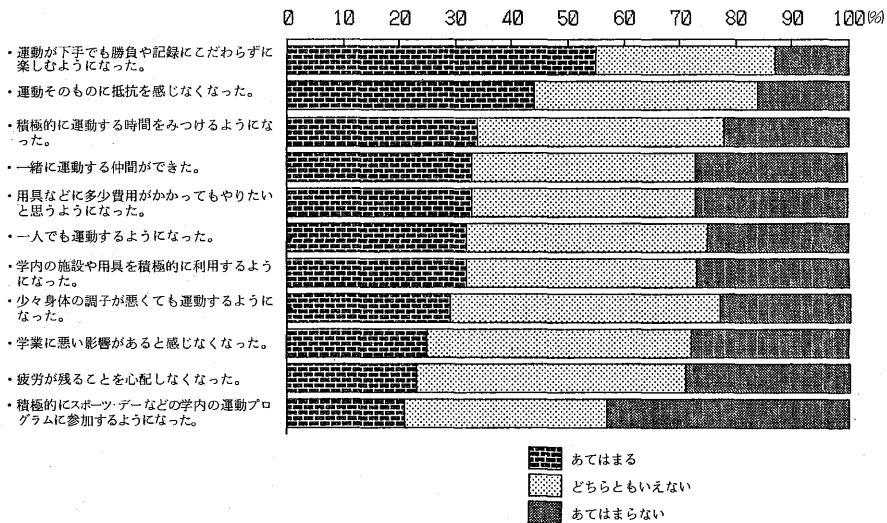


図28 正課体育授業が体育やスポーツを行うことに対する抵抗条件におよぼす影響

前述した運動生活階層別にみた傾向と類似している。

### 7 正課体育履修が生涯スポーツのための基礎的能力や意識におよぼす影響

図29は、スポーツの生活化に対する効果に関する各小問の回答状況を示したものである。4年間の正課体育の履修によって「スポーツに対する興味・関心が深まった」、あるいは「スポーツをこれからの日常生活に取り入れていこうと考えるようになった」と回答者は、約60~70%存在した。しかし、生涯スポーツを実践するための「基礎的知識や方法が理解できた」、あるいは「運動技能が習得できた」という問に対して、「どちらともいえない」あるいは「いいえ」と答えたものが60~75%を占めていた。

この結果は、本学の正課体育がスポーツへの興味・関心や実践への意欲を呼び起こすのには効果があったことを示すものと考えられるが、同時に現代における健康・スポーツブームにも大きく影響を受けると考えられるので、これらの結果がすべて授業の効果によるものとは言えないことに注意する必要がある。

ろう。

一方、スポーツ実践のための基礎的知識や方法の理解、技能の習得には、授業が大きく影響すると考えられるが、本学の正課体育の開設科目には、高校時代までにほとんど経験がないため、大学における授業による運動技能の向上が顕著なものと、それまでに経験が比較的豊富で、運動技能の向上が小さいものがあることから、これらの結果のみでは、授業効果がないとは言えないであろう。

図30は、生涯スポーツへの意志と授業効果としてのスポーツへの興味・関心の深まり、基礎的知識や方法の理解および技能の習得との関係をみたものである。生涯スポーツへの意志があると答えたものは、スポーツへの興味・関心を深め、基礎的な知識や方法を理解できたとしたものが半数以上を占めていることがわかる。しかし、生涯スポーツへの意志の問に対して、「どちらともいえない」と答えたものは、いずれの問に対しても、「どちらともいえない」あるいは「いいえ」と答えているものが多く、生涯スポーツへの意志の問に対して肯定的回答を示したものでも67.4%のものが運動技能の習得には、「どち

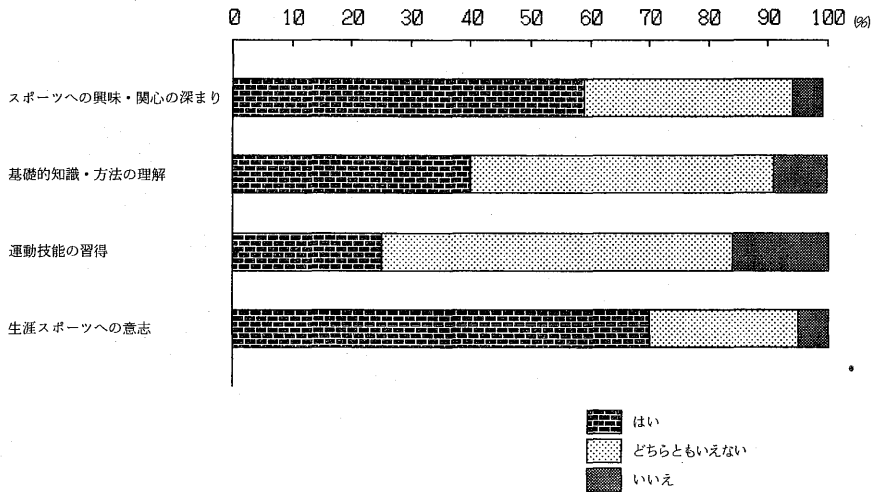


図29 スポーツの生活化に対する効果

らともいえない」と答えている。

これらの結果は、スポーツに対する興味・関心を深めることが、生涯スポーツへの意志を育む第一歩であることを示していると考えられるが、基礎的知識や方法の理解、さらに運動技能の習得と生涯スポーツへの意志との関係は明確ではないようである。しかし、技能の習得ができたと答えたものの93%が生涯スポーツへの意志があるとしていることを考えると、生涯スポーツの実践を促進するには、運動技能の習得が不可欠になると思われる。

図31、出席態度と正課体育によるスポーツの生活化におよぼす効果との関係をまとめたものである。いずれも、より積極的に授業に出席した者ほど、より肯定的な回答をしている。

次に、生涯スポーツの実践に係わる基礎的知識や方法の理解、運動技能の習得に関する質問と生涯スポーツへの意志との関係から、スポーツの生活化への効果をあげるには、どのような体育授業が望ましいかについて検討することにする。

上述した項目に関係のある質問は、Q2の体育授業の実感、Q14の体育授業において喜びを感じる時、Q15の新しい体験および運動

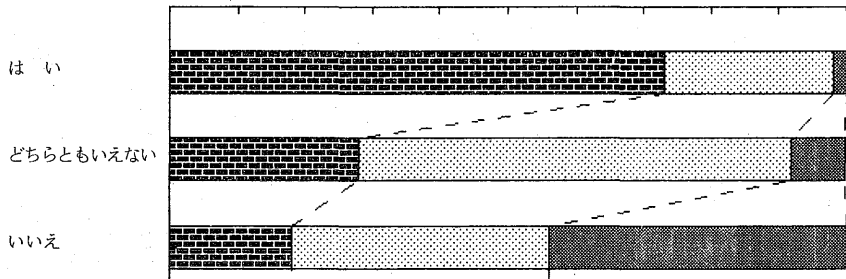
技能水準の向上、Q16問3の体力・健康の維持・向上のための知識、方法の理解などに関するものであろう。生涯スポーツへの意志に関して肯定的回答をしたものの多くが、これらの質問に対して肯定的に答え、逆に、生涯スポーツの意志に関して否定的に答えた質問項目をあげると、体育授業の実感に関するものでは、「スポーツ技能を向上される時間」、「連帯感・協力の楽しさを知る時間」、「友人を見つけられる機会」、「スポーツの意義・重要性を学ぶ機会」、「生涯スポーツの基礎をつくる機会」などであった。また、Q14の喜びを感じる時のうち、「運動技能が伸びた時」、「体力や運動能力の伸びが確かめられた時」(図32)、あるいはQ15の運動技能水準の向上(図33)にも同様の関係がみられた。さらに、図34に示すように、生涯スポーツへの意志と4年間履修の意義のとらえ方についての関係を見ると、正課体育4年間履修を肯定的にとらえている学生の大部分は、今後スポーツを生活の中に取り入れていこうと考えているが、否定的にとらえている層には、今後スポーツを生活化することに消極的な姿勢をもつものが多い結果であった。

これらのことから、大学生の生涯スポーツ



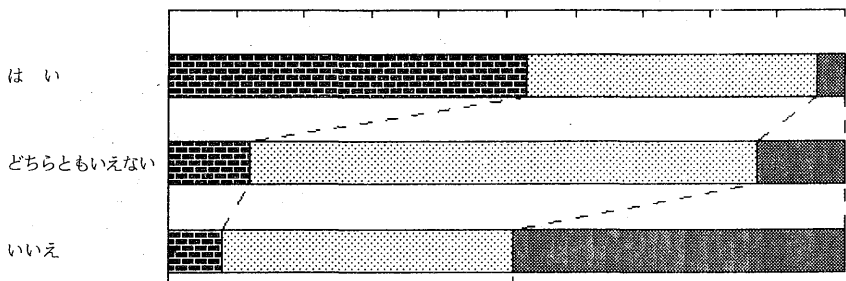
スポーツへの興味・関心の深まり

生涯スポーツへの意志 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 (%)



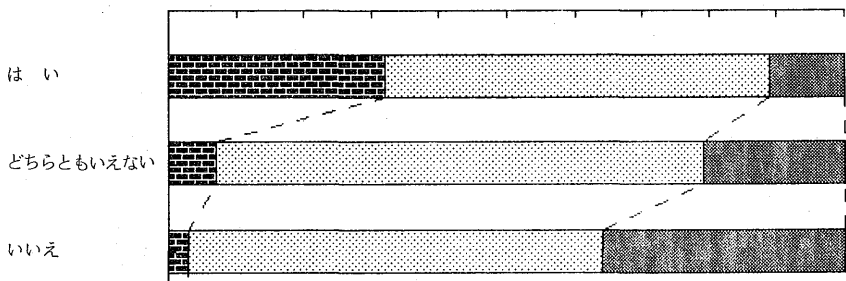
基礎的知識や方法の理解

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 (%)



運動技能の習得

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 (%)



はい  
 どちらともいえない  
 いいえ

図30 生涯スポーツの意志と体育授業の効果との関係

への意欲を高めるためには、運動やスポーツの楽しさを味わわせることに加えて、体力・運動能力および運動技能の向上が体験できるような授業をすることが必要であると言えよう。

VI. 要約

以上の調査結果を要約すると以下のようである。

1. 4年間にわたって正課体育4単位を取得する制度は大部分の学生に肯定的に受けと

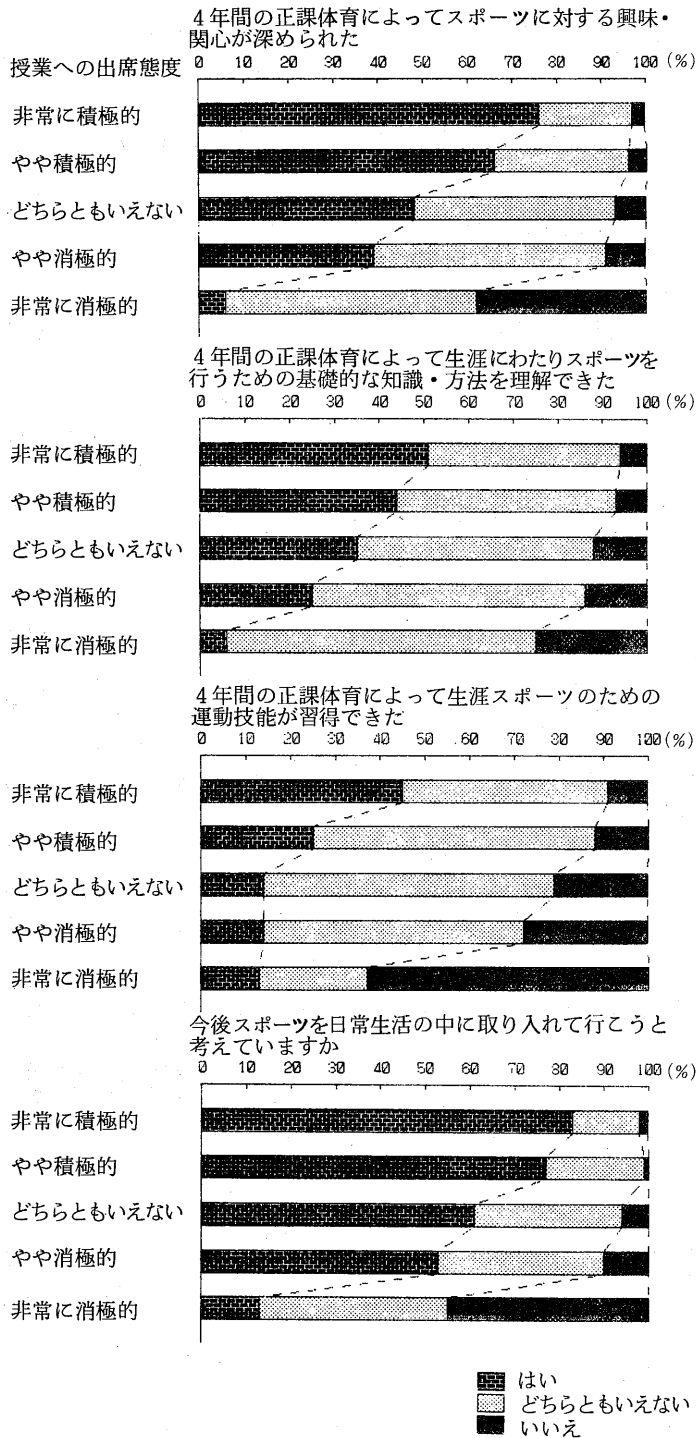


図31 出席態度と生涯スポーツに関する質問項目との関係

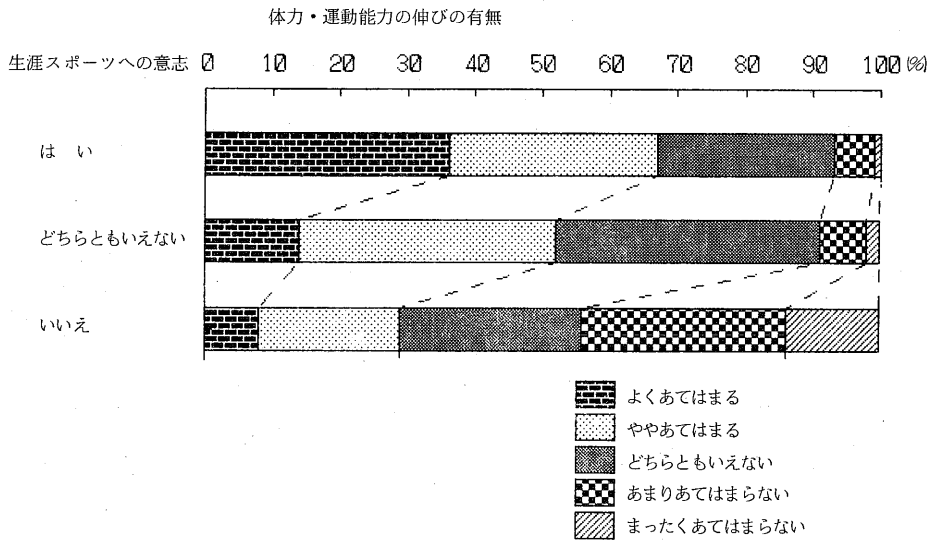


図32 生涯スポーツへの意志と体力・運動能力の伸びの有無との関係

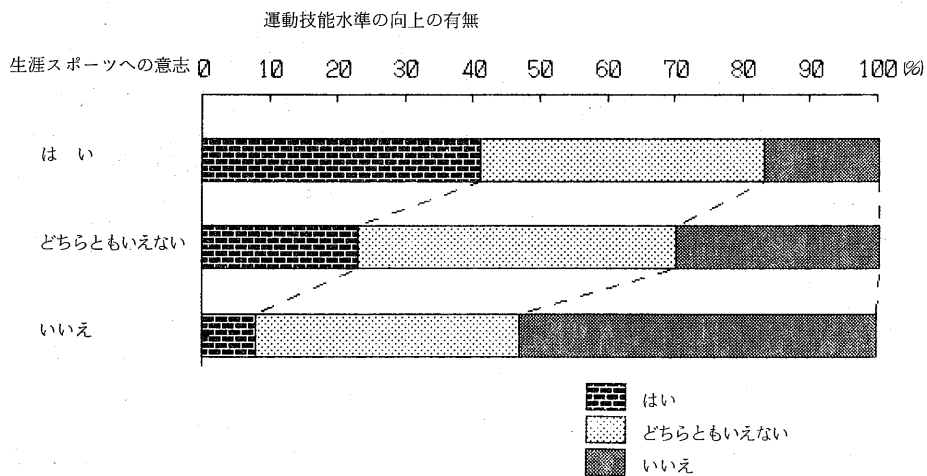


図33 生涯スポーツへの意志と運動技能水準の向上の有無

められた。種目選択にあたっては4年間4種目の現行制度が最も支持されており、重複履修についても肯定的であった。集中コースの開設にも肯定的であったが種目選択の際の抽選方式や開設時間割・開設時期についてはやや不満が表明された。正課体育における指導方法・評定・施設に対してはそれぞれ61%、69%および85%の学生が満足しており、そのなかでも指導者の人柄や姿勢、出席を成績評

価基準の対象にすること、ならびに施設の種類と広さなどに特に満足度が高かった。一方、目標とする技能水準や運動量の設定についてはやや不満を表明するものがあり、施設については更衣室・ロッカー・シャワーに不満を表明するものが30%いた。

2. 4年間の正課体育履修の効果については、新しいスポーツや運動の体験ができたとする学生が77%、体力水準や健康水準が高

今後スポーツを生活の中に取り入れますか

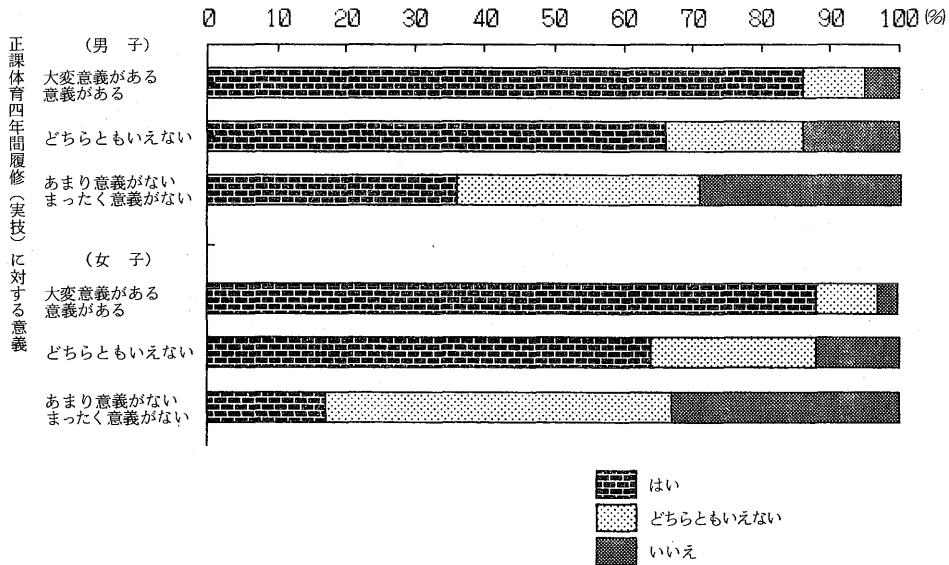


図34 正課体育4年間履修の意義のとらえ方から  
みたスポーツの生活化に対する姿勢の違い

まったく認めている学生は15%、および知識、理解力の向上について認めている学生は32%いた。これらのことから、体力水準や健康水準の言葉の意味も含めて正しい理解の仕方や実践の重要性を積極的に授業に取り入れる必要性が示唆された。性格、人間関係の改善、運動に対する抵抗感の減少、および運動技能の向上についてはそれぞれ28%、36%および35%のものが認めていたが、いずれの項目についても、どちらともいえないと回答したものが多かった。しかしながら、正課体育の受講によって、スポーツに対する興味や関心を深めることができたとするものは59%おり、さらに今後スポーツを日常生活の中に取り入れていこうと考えているものが70%いた。これらのことから、多くの学生は正課体育を通じて直接、体力や健康水準を高めたり、運動技能の向上をはかったりする効果は認めていないが、スポーツを行うことによって興味や関心を高め生涯スポーツの発展に対する寄与に関しては、その効果を認めているとみるこ

とができる。

3. 正課体育を4年間履修することの意義については約80%の学生が肯定的にとらえている。また、日常生活において積極的にスポーツを行っているもの、正課体育への出席態度の積極的なものほどその傾向が強い。一方、多くの学生は正課体育授業を積極的に学ぶ機会、あるいは望ましい体験ができる機会として肯定的にとらえている。さらに、その授業は、十分体を動かして汗をかく場であり、ときに気分転換をはかり解放感を味わえる場であるとの認識をもっている。大学の正課体育授業は、将来の生涯スポーツへの貢献、スポーツの生活化を最大の目的としている。その意味において、筑波大学における正課体育授業が、仲間と楽しく、夢中に運動ができる場として、80%の学生に意義ありと評価されていることは、喜ぶべき事実であると思われる。しかし、これに加えて、体力、運動能力および運動技能の向上が体験できるような授業となれば、その意義はさらに増すことになる。

## 参 考 文 献

- 1) 徳永幹雄, 佐久本稔: 大学における体育スポーツの社会学的研究——特に学生の体育・スポーツに対する態度について——, 体育学研究, 12: 32, 1968.
- 2) 小林 篤, 徳永幹雄, 桑野 豊: 大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅰ, 九州大学体育学研究, 3: 69-78, 1967.
- 3) 小林 篤: 大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅱ, 名古屋大学教養部紀要12: 87-105, 1968.
- 4) 岡野崇彦ほか: 大学の正課体育実技の教育効果に関する研究 (5) ——体育実技授業に対する態度——, 東京大学体育学紀要 6: 27-32, 1972.
- 5) 寄金義紀, 山川岩之助: 運動生活の実態と正課体育履修. 大学体育研究, 4: 188~198, 1982.
- 6) 山川岩之助ほか: 筑波大学生の運動生活に関する調査, 大学体育研究, 6: 63~104, 1984.
- 7) 宇土正彦: 体育管理学, 133~134, 大修館書店, 東京, 1970.
- 8) 高田典衛: 授業としての体育, 26, 明治図書, 東京, 1972.
- 9) 小林 篤: 体育の授業研究, 193, 大修館書店, 東京, 1978.
- 10) 海野 孝, 阿江通良, 松下雅雄, 木原資裕, 外川重信: 大学正課体育における授業効果に関する調査研究, 大学体育研究, 6: 105~124, 1984.